

2023年10月15日 久宝教会 礼拝メッセージ

「天国はどこにありますか」

牛田匡牧師

聖書 ルカによる福音書 17章 20-37 節

「天国はどこにありますか?」と質問された時、皆さんはどのようにお答えになるでしょうか。そもそもそのような問いが出て来る場面というもの自体が、普段の日常生活の中では、あまりない事かもしれません。私の個人的な経験かもしれませんが、この問いは「人は死んだらどうなるのか。どこに行ってしまうのか」という問いと一緒に語られることが多いのではないかと感じています。子どもは大体5歳前後で、「死」というものを考え始めると言われていますが、「人は死んだらどうなるのか。どこに行ってしまうのか」と心配する子どもに対して、「人は死んだら、天国(極楽)に行くんだよ」と答えることは、恐らく、少なくないのではないのでしょうか。

それでは、死んだ人が行く「天国・極楽」とは一体、どこにある、どのような場所として、それぞれの人にイメージされているのでしょうか。かつてゴダイゴが歌っていた「ガンダーラ」という曲の中では、西方にある夢の国は「そこに行けば、どんな夢もかなうと言う。生きることの苦しみさえ消えると言う。誰もみな行きたがる、遙かな世界。何処かにあるユートピア」などと歌われていましたが、漢字二文字で表わす「極楽」という字の如くに、美しく穏やかな楽園のイメージとして、理解されていることが多いのではないかと思います。

それは言い換えれば、いつの時代でも人間が生きている現実世界が、いつでも思い通りになるわけではない、ということの裏返しなのではないのでしょうか。現実世界では、むしろ自分たちの願った通りのなることの方が少なく、自然災害や、戦争、また貧困や差別、為政者からの圧政など、様々な困難にあふれていたからこそ、「死んだ後にはそれらから解放されて楽になりたい」という願いが形となったのかもしれない。そして、それは今から2000年以上も昔の古代イスラエルの人々にとっても同様でした。戦争や飢饉など、現実が厳しければ厳しい程、それらの苦しみから解放される来世に期待する気運は高まりました。

イエス様がこの地上を歩まれた時代、古代イスラエルの国は古代ローマ帝国の支配下にあり、植民地とされていました。特にイエス様と弟子たちが生活していたガリラヤ地方というのは、穀物やブドウ酒、オリーブ油、ガリラヤ湖で獲れた魚など、

様々な農産物を産出する地域でしたが、それらはよく言えば「輸出」「献上」でありましたが、農民たちにとっては「搾取」であり「取り立て」に他なりませんでした。ローマ皇帝が神とされていた時代に、古代イスラエルの人たちにとって、自分たちが代々信仰してきた命の神ヤハウエと、ローマ皇帝のどちらに従うべきか、というのは深刻な問題でした。そして、そのような背景の中で、イエス様に対する「皇帝への納税はどうすべきか」という答えにくい質問があり、それに対するイエス様の「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に帰しなさい」という回答もありました（マタイ22:15-22 並行）。

そもそも福音書の中に書かれている「神の国」「天の国」という言葉（バシレイア）は、どこかにある場所のことを指しているのではなく、「神の支配する所・神の統治が及ぶ所」という意味です。自らを神と呼ばせている人間であるローマ皇帝の支配が及んでいる世界ではなく、ヘブライ語聖書に記されている命の創り主である神ヤハウエの支配が及んでいる世界、それが聖書のいう「神の国」「天の国」でした。そしてそのような「神の国」を実現してくれる指導者を「キリスト」「メシア（救世主）」と呼んで待ち望んでいました。ですから、人々にとってのキリスト、メシアとは、軍事力をもってしてもローマ軍を追い払い、古代イスラエルの独立を勝ち取るように導いてくれる指導者のイメージだったと思われます。

そしてそのような歴史の大転換点には、天変地異などの非日常的なことが起こるとも考えられていました。今回の聖書の箇所にある「<sup>20</sup>ファリサイ派の人々が、神の国はいつ来るのかと尋ねたので、イエスはお答えになった。『神の国は、観察できるようなしかたでは来ない。<sup>21</sup>「ここにある」とか、「あそこにある」と言えるものでもない』」という言葉は、そのことを指しています。夜空に普段は見えないほうき星が見えたとか、大地震が起きたとか、何かいつもの違うことが起きると、それは世界が変化する「しるし」、予兆だと考えられていましたので、ファリサイ派の人々は日々様々なことを「観察」していたのでしょう。しかし、イエス様はそんなものではないと言われました。「神の国は、観察できるようなしかたでは来ない。<sup>21</sup>『ここにある』とか、『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの中にあるからだ」……。どこかに「これから来る、やがて実現するだろう」というのではなく、「もう既に来ている。あなた方の中に、すなわち私たちの中に、もう来て

いる」とは、一体どういうことなのでしょう。

ここで「あなた方の中にある」と言われているのは、「手の届く範囲内にある」ということであり、言い換えれば「自分たち自身の足下、他ならない現実を見たら分かるはず」ということでした（田川建三）。例えば、日々の農作業の中で、畑に蒔いた種が発芽し、生長して、やがて実を結ぶ命の不思議、そのような現実それ自体が、まさに神様の働き無しには決してあり得ないことであり、神様の支配、神様の力の及んでいる世界そのものではないか、ということです。

22 節以降は、何だか分かりにくい表現が続いています。「人の子」とは、単純に「人間」そのもののことですが、同時にヘブライ語聖書からの伝統として、世界の終末、この世界の完成、神の国の到来の時に現れる神的な存在とも考えられていました。そのために弟子たちはそのような人の子の到来の予兆を探そうとしていたわけですが、イエス様はそのような弟子たちに、人の子の到来についても「そういうものではない」と言われました。そして「稲妻が閃いた時には、大空の端から端まで輝くように、人の子が現れた時も、明らかだ」（24）とも言われました。すなわち、誰にでも分かる形で人の子は来るということです。しかも、26 節～30 節にあるように、その人の子との出会いは、日常の中で、ある日突然に起こる。更に 31 節以降にあるように、その人の子との関わりには、自分自身の身を捨ててかかる覚悟が求められる、ということでした。

ここまで読むと、世の終末、神の国の実現の際に来ると言われていた「人の子」とは、イエス様ご自身のことであり、さらには命の神が共にいてくださっている私たち人間の一人一人であり、日々の生活を送っている私たちの隣り人の一人である、ということがお分かりになるのではないのでしょうか。人の子は日々の生活の中で、もうすでに来ている。そこに来ている神の国、天の国の存在に私たちは気付けるかどうか、そのことが問われているのではないかと思います。

さて、「神の国、天の国はどこにありますか」と問われた時、私たちはどのように答えるのでしょうか。「天」というと日本語（やまとことば）でも、空の上の方を想像するかと思います。しかし、雲の上に行っても神様は見つけれませんし、もちろんロケットに乗って宇宙に行っても、そこに神様の姿を見つけることは出来ないだろうということは、現代を生きる私たちにとっては、当たり前のことです。「天」とは、自

分の頭の遥か上空、大気圏を越えた宇宙空間のどこか、ということではなく、「目に見えない神様の働かされている所」という意味で、理解する方がふさわしいと思います。

命の創り主である神様は、生きとし生けるもの全ての命と共に在ります。また造られたこの世界の全ては神様の存在を示しています(詩編 19 編)。神様の力、働きの及ばない所はどこにもありません。神の国はもう来ている。私たちの間に、足下にもう来ている。そのことを覚えて、隣り人と共に今日一日を歩みたいと思います。

そのようなことを思う一方で、世界の情勢を眺めると、ロシアとウクライナの戦争に引き続き、イスラエルとパレスチナやシリアの間でも武力衝突が起こり、多くの人々の暮らしが破壊され、血が流されています。そのような中、極右政権や軍部とは別に、イスラエルの市民たちは「長蛇の列を成して献血し、交戦地帯からの避難民を自宅に喜んで受け入れ、食物や衣料、その他の必需品を寄付している」(ユヴァル・ノア・ハラリ 2023/10/14 東洋経済オンライン=2023/10/11 米ワシントンポスト紙)と伝えられています。命を破壊する戦争が一刻も早く収束するように反対の声をあげると共に、草の根の活動として各地で行われている隣り人を大切にする働きが、今日一日もまた守られますようにと祈ります。命の神が働かれている今この時に、私たちもその働きに一步でも加わることが出来るように、命を守り平和を造るために私たちは今日もここから用いられていきます。